

会議名：株式会社広域高速ネット二九六

2025年度 印西市・八街市・栄町・酒々井町 放送番組審議会

日時： 2026年2月6日（金）11:30-14:00

場所： 広域高速ネット二九六 通信技術センター会議室

出席者： 番組審議委員および弊社役員・社員 11名

#### ■出席委員

大谷 文男 委員	酒々井町商工会 会長
坂巻 栄一 委員	印西市商工会 会長
塩崎 一郎 委員	栄町教育委員会 教育次長 (栄町教育委員会 教育長 藤ヶ崎 功 委員代理)
林 洋子 委員	酒々井町教育委員会 教育長
福田 守 委員	八街商工会議所 会頭
安永 順子 委員	ボランティアグループ 「けやきの会」 代表
渡邊 義規 委員	印西市教育委員会 教育長

#### ■株式会社広域高速ネット二九六 出席者

藤本 光弘 代表取締役社長  
伊藤 完 常務取締役  
藤本 健太郎 企画制作本部放送制作部 部長  
兼子 喜幸 企画制作本部放送制作部 グループ長

〈事務局〉平川 裕 企画制作本部放送制作部

## 番組視聴

### ■今年度制作・放送した番組

1. ふるさと発！ ドキュメント 地域∞無限大  
「朝鮮人からの手紙 ～関東大震災 救援の記録～」(30分番組)
2. 壮観劇場「東京湾アクアライン」(30分番組)
3. 戦後80年特別番組「ドカンに震えたまち～九十九里と米軍基地の10年～」(30分番組)

## 番組審議

### ■<大谷 文男 委員>

「朝鮮人からの手紙」は、関東大震災に関する出来事が身近な場所で起きていたことを知る機会となりました。困難な状況の中でも人に対して優しさを示した方々の存在が印象に残り、そのような姿勢の大切さを改めて感じました。

「東京湾アクアライン」は、ドローンによる映像が非常に印象的で、普段見ることのできない高所作業の様子を知ることができました。安全を支える方々の苦労や、撮影における技術や準備の大変さも伝わってきました。

「ドカンに震えたまち」は、戦後も地域の中で様々な出来事や苦労があったことを知る内容であり、戦争の影響が長く続いていたことを改めて考えさせられました。現在も世界では紛争が続く中で、こうした歴史を知ることの重要性を感じました。

### ■<坂巻 栄一 委員>

「朝鮮人からの手紙」は、広島平和記念公園で見た資料とも重なり、改めていろいろな出来事があったのだと感じました。デマについても、人が自分の身を守るために「そうかもしれない」と思う側面があるのではないかと感じましたが、その中で町長が相手を敬う姿勢で対応されたという話は印象に残り、人としてこうありたいと思わせていただきました。

「東京湾アクアライン」は、ドローンの映像が素晴らしく、普段見ることのできない視点からの映像だと感じました。これまで建設に関する内容を見る機会はありませんでしたが、今回はメンテナンスという視点から見ることができ、また違った意味で関心が深まり、より身近に感じました。

「ドカンに震えたまち」は、九十九里にそのような基地があったことを知らず、身近な場所にもこうした歴史があったのだと感じました。県内でも同様の背景を持つ場所があることを知り、改めて考えさせられました。

こうした身近な地域の歴史を知ることで、遠くの出来事ではなく、自分たちの問題として平和について考えるきっかけになるのではないかと思います。また、今回の番組を通して県内のさまざまな地域が取り上げられていることも分かり、今後もこうした内容を発信していただければと思います。

### ■<塩崎 一郎 委員> (栄町教育委員会教育長 藤ヶ崎 功 委員代理)

「朝鮮人からの手紙」は、大震災という一般的な被害状況などが中心に伝えられることが多いと思いますが、この番組のような視点で構成されたものは初めて見まして、良かったと感じました。多くの場合、同じような視点で物事が語られがちですが、このように違った視点から発想している点は難しいことだと思いますし、印象に残りました。

「東京湾アクアライン」についても同様で、通行や建設時の話、風景についてはこれまでも見聞きする機会はありませんでしたが、番組で取り上げられていたようなメンテナンスの視点での内容は初めてで、その大変さが

よく伝わってきました。

「ドカンに震えたまち」は、九十九里に米軍基地があったということは今回初めて知りました。当時の状況や苦労が、映像やインタビューを通して伝わってきて、そういう時代だったのだと感じました。

いずれの番組も、これまでとは少し違った視点で物事を捉えており、印象に残る内容でした。

#### ■<林 洋子 委員>

「朝鮮人からの手紙」は、昨年の津田梅子さんの番組を思い出しながら拝見しました。一人の方に焦点を当てて、その周りを描いていく構成が印象的でしたが、今回も石毛町長に焦点を当てながら、周囲の出来事を丁寧に描いていた点がとても良かったと感じました。朝鮮の方々を守り、手厚い対応をされたという内容について、日本人の心のあり方を表しているように思いました。困っている人を助けようとする姿勢は、日本人の良さの一つだと思います。その点に焦点を当てていたことが印象に残りました。

「東京湾アクアライン」は、点検に携わる方々が危険な環境の中で作業されており、そうした方々が人々の安全を支えていることが伝わってきました。また、その姿を映像として伝える制作側の努力も感じられました。ドローンの映像についても、風との戦いの中で撮影されたということで印象的で、周囲の景色とともにその重要性が伝わってきました。

「ドカンに震えたまち」は、九十九里に米軍基地があったという事実を知る機会となりました。当時の方々の生の声を聞くことができた点も良かったと思います。番組内に出てきた「長欠」という言葉も印象に残り、当時と現在の状況の違いを感じながら視聴しました。また、自分の町に対して複雑な思いを抱いていたという話もありましたが、本来は自分の町に誇りを持てるような環境づくりが大切だと感じました。

3本の番組を通して、制作された方々の思いを感じるとともに、これからの教育の中で、子どもたちが自分の好きなことを見つけ、それを伸ばしていくことの大切さにもつながる内容だと感じました。

#### ■<福田 守 委員>

「朝鮮人からの手紙」については、日本人の中には誤った行動をとった部分もあったと思いますが、その一方で助けた方々もいたということを知り、そのような立派な方がいたのだと改めて感じました。構成もよくできていたと思います。

「東京湾アクアライン」は、普段よく通る場所ですが、あれほどの技術や努力があることを改めて知りました。ドローンの映像もきれいで、撮影の大変さが感じられました。これまで見た番組とも重なる部分があり、興味深く拝見しました。

「ドカンに震えたまち」は、身近な場所でありながら、これまであまり知らなかった内容でした。戦後間もない時期にそうした状況があったことを知り、改めて驚きました。

3番組とも、構成や映像がよくできており、印象に残りました。せっかく良い番組なので、より多くの方に見てもらえるようなPRも必要ではないかと感じました。

#### ■<安永 順子 委員>

「朝鮮人からの手紙」は、デマを流すのも人間であれば、朝鮮の方々を助けたのも人間であり、良い面も悪い面も含めて人間なのだと思います。自分自身も弱いところがありますが、少しでも誰かを助けられる場面があれば力を貸していきたいと感じました。

「東京湾アクアライン」は、風の影響や高所での作業についてはテレビで見たことがありましたが、今回のように現場の様子や苦労まで伝わってきたのは印象に残りました。特に「今日も生きて帰れるように」という言葉が心に残りました。ドローンによる臨場感のある映像も良かったと思います。また、「夢と情熱とプライドをかけて」という言葉も印象的でした。

「ドカンに震えたまち」は、この地域でこうした出来事があったことを知らず、驚きました。沖縄の基地問題はよく取り上げられますが、九十九里でも同様の状況があったことを知り、当時の住民の方々の不安の大きさを感じました。時間の経過とともに証言される方が減っていく中で、このように記録として残すことで、後の世代にも伝えていくことができるのではないかと思います。

■＜渡邊 義規 委員＞

「朝鮮人からの手紙」は、現代でも選挙報道などでデマやフェイクニュースが問題になっていますが、100年前にも同じような事実があったということを改めて感じました。さらに、自警団がつくられ虐殺が起きたという史実をしっかりと紹介していただいた点は重要だと感じました。千葉県でも福田村事件などがありますが、それとは別に小見川の事例を取り上げていただいたことに価値があると思います。何が真実なのかを見極める力を養うことは、今の子どもたちにとって大切なことで、今回の番組は、「知らなかった」「調べてみたい」と思えるきっかけとなる内容であり、人権教育にもつながるものだと思います。また、小見川の感謝の手紙があまり知られていない背景に記録の少なさがあることから、記録を残すことの大切さも改めて感じました。今回の番組は、後世に残る貴重な記録になったのではないかと思います。

「東京湾アクアライン」についてですが、建設当時の技術の素晴らしさはもちろんですが、今回はその後の保守・維持管理に携わる方々に焦点を当てていた点が良かったと思います。ドローン映像や青空、夕焼け、夜景なども印象に残りました。

「ドカンに震えたまち」についてですが、当時を知る方々が少なくなっていく中で、このような番組が作られたこと自体が貴重だと感じました。基地の歴史だけでなく、地域で暮らす人々の生活に焦点を当てていた点が印象に残りました。漁業への影響や、長欠や弁当が持参できない子どもたちの状況など、一人ひとりの生活から基地の存在を捉えていた点が分かりやすく、心に残りました。

出演者の方が「生きている限り戦後は終わらない」とおっしゃっていましたが、私はこれまで「今を戦前にしてはいけない」ということを子どもたちに伝えてきました。そのためにも、まず歴史的事実を正しく知ることが大切であり、今回の3つの番組はいずれもそのための良い教材になるのではないかと思います。

以上